

令和4年度 第6回岐阜県社会教育委員の会 議事録要旨

1 日時 令和5年2月3日(金) 10:00~12:00

2 場所 岐阜県議会棟 第2会議室

3 出席者(委員の現在数14人 出席者10人)

<委員>

天野 知子
岩田 睦巳
野中 準二
藤村 美保子
益川 浩一
松野 泰啓
松山 昌代
村瀬 眞実
森 清美
米原 木ノ実

<事務局>

環境生活政策課長 山田 浩司
生涯学習企画監 石井 幹也
生涯学習係長 野村 めぐみ
課長補佐 堀 正樹

4 議事

(1) 令和4年度の社会教育施策と令和5年度の方向について

・資料をもとに事務局から説明

益川議長：ぎふ地域学校協働活動センターの補足説明をさせていただく。岐阜大学と県が共同設置したもので、子どもを核とした地域づくりを進めるための人材育成、本部・学校運営協議会の立ち上げ・運営支援等を実施している。

大学と自治体と一緒に組織を作り、地域学校協働活動を推進しているところは全国初である。その成果として、学校運営協議会の整備率は全国で4位、地域学校協働本部の設置は、6割くらいまで進んでいる。文部科学省では、地域学校協働活動と学校運営協議会の一体的推進を進めているが、両方の整備率は全国で6位となっている。来年度以降、地域学校協働本部等の組織の立ち上げから次の課題が見えてきていることから、さらに発展的にセンターの活動を進めていきたいと考えている。

事務局からの説明について、ご質問等いかがか。

村瀬委員：P3課題について、市町村により参加に偏りがあるということだが、この研修に限ったことか。それとも社会教育関係全般にいえることか。

益川議長：地域学校協働・学校運営協議会の関係だと、自治体により様々な事情があると思うが、地域や学校の理解がまだまだというところがあるかもしれない。いざ組織化するとなると様々な要因で進まないということがあると思う。センターではそのような自治体にも積極的に働きかけを行っていきたいと考えている。

村瀬委員：学校の教員に対する研修の参加は、かじ取りをできるのが校長だと考える。校長がぜ

ひ聞きたいと思う内容・講師にすると、学校に浸透すると思う。

益川議長：研修に参加いただくと刺激を受けられるので、マネジメントをされている方々に積極的に参加いただけるよう働きかけていきたい。

岩田委員：P3 社会教育主事講習について、地元岐阜大学での開催ではない年に 12 名の受講は多い。市でも窓口に社会教育士とは何か、取得したいという問い合わせがあるところ。今年度どのような所属の方が受講されたのか。教員系なのか、教員でない方なのか。

事務局：正確な数は持ち合わせていないが、教員で行政に配置されている方が多い。PTAの役員や、まちづくり協議会の方など行政ではない方が3分の1くらいはあった。

岩田委員：社会教育士に制度が変わったことで、教員系ではない方にぜひ積極的に取得してほしいと考える。

益川議長：まちづくり協議会の方や、学校運営協議会に関わっていらっしゃる方、もちろん教育委員会に配置されている教員の方もいらっしゃった。受講者の層が広がってきており一般の方の受講も増えているが、教員の方にももっと受講してほしい。社会教育や地域への理解が深い教員が増えていき、そういう方が管理職になれば、地域学校協働活動もさらに進むと考える。

山口県では、社会教育士資格を持っている教員採用試験受験者に加点するなどアドバンテージを与えている。岐阜県の教員採用試験にも取り入れていただくよう教育長に提案しているところ。

岐阜大学には、社会教育の専門教員が他に 2 名いることから、うまく大学を活用いただき、社会教育士の養成につなげていただきたい。

野中委員：P4 学生ボランティアは市町村を通じて呼びかけているのか。

事務局：市町村が行っている事業に大学生をぜひ活用したいという市町村を募っている。事務局は学生とのマッチングをしている。

野中委員：大学で呼び掛けられるのは、教職を目指す学生が多いのか。また、大学では先生が個別に声掛けをしているのか。

事務局：小・中学校の教員を目指す学生が比較的多い。大学によって掲示板で受付したり、講義の中で対面で声かけすることなどさまざまである。

野中委員：3 年生になってくると、就職活動で学生時代に何をしてきたかを聞かれることになるが、ボランティアは自分をアピールする材料になる。呼びかけの対象を広げていけばボランティアが増える可能性はあるかと思う。

益川委員：大学では在学中に社会教育士の資格が取得できる課程があり、社会教育実習として、受講学生を市町村事業に派遣している。教育学部のみならず他学部にも門戸を開いているため、工学部や応用生物科学部や地域科学部の学生も社会教育士を取得している。本年度おおむね依頼のあった市町村にはうまくマッチングできた。教員希望の学生が、教育実習では見られない子どもたちの姿を見ることができ良い機会となっている。

天野委員：自分は、大学時代にボランティア活動をリーダーとしてやったのが現在の活動の始まりである。本巣市にも学生ボランティアに来てもらっているが、子どもたちが年齢の近い方に習うことによって自分の能力以上のものを発揮できている。大学では、部活動・サークルでボランティア活動をやっているところがあり、コロナ禍で活動が限ら

れているが、子どもたちのところに若い学生が支援に入る活動が広がっていけばよい。

益川議長：年齢の近い学生の方が、子どもたちにとってもひと味違うと考えられる。

村瀬委員：ボランティアを必要としている場が学校であれば、市町村へは学校教育関係課へ照会する方が適切ではないか。また、郡上市や飛騨市にはそもそも大学生がいないという理由で、市から要望が出づらいことから、募集時に夏休みや冬休みの帰省している際の支援ということにすると、希望があるかもしれない。また、高校生はどの地区にもいるため、教育委員会で行っている高校生のミニ教育実習とタイアップするということも考えられる。

益川議長：要望いただくことはありがたいことなので、必要なところに情報がとどくよう事務局で工夫・検討いただければ。

（２）岐阜県の社会教育委員の会の活動について

- ・資料をもとに事務局から説明

益川議長：続けてご説明いただき、その後議論に入る。

（３）成果物の作成計画について

- ・資料をもとに事務局から説明

益川議長：これまでは「人」ということに着目して会の議論を進めてきたということを確認させていただく。まず冊子については、初歩的なハンドブックという形で社会教育委員の会で議論して作成した。次の段階で、1枚物のパンフレットを作成した。他の良い事例を参考に自分たちの活動につなげていただきたいという思いを込めて、わかりやすくまとめて、気軽に手に取れるものということで作成した。

今回3回目、「人」に着目してこれまでお話をしてきたが、関係者の方に活用いただけるものということに主題を置きながら、審議題の議論を生かして作成を進めていきたい。冊子体というもので、改めて作成することもあり得るし、これまでのものを少し改訂するということも考えうる。

文科省は学校を核としたと言っているところを、あえて、県では子どもを核としたと言っている。人が重要ということで、様々な立場の方からお話を聞いてきた。人材が大事だということで進めていきたい。こんな内容が盛り込まれるとよいことや、デザインや大枠の方向性ということで、「人」に着目しているということ踏まえたうえでいかかがか。

米原委員：前回の議論では、QRコードを掲載するのが良いという意見があり入れることになった。紙の情報は更新されないが、QRコードの先の情報が最新のものに更新されるという工夫をした。

松山委員：家庭教育やPTAとしては、学校・地域と協働でという言葉は出てくるが、実際は学校とだけの関係になっており、地域と顔を合わせる機会が少なくなっている。自分の住んでいる大垣市がどうなっているのか分からないため、自分のまちではどういった社会教育の活動が行われていて、自分の学校とどうつなげていったらよいかという具体的なことがわかるようなものがあると良い。PTAとしても地域とつながることを

大切に思っており、地域でどんな活動をしていて、どこにどう連絡して、どうつながっていただけるかなどを具体的に知りたい。

益川議長：具体的な情報が必要ということであった。エリアということも意識した方が良いのかもしれない。

松野委員：活用していただくという意味では、人材がテーマのため、学校・地域の関係者も例えば民生委員がどういう役割か意外と知らないと思う。いろいろな団体の取り組みがあるが、民生委員や人権擁護委員という名前が出てきても、何をしていたらどういう役割なのか分からない。説明があったうえで、実際に良い取組を行っている一人を取り上げる。こういう方に協力いただいたら、こんな成果が出たということが見える化できるとよい。

益川議長：冊子は、初歩的なものでなるべく分かりやすくということで作成したが、それでもなお分かりづらいということがある。CSや活動も進んでいるが、初心に帰って少しバージョンアップするという方向性もある。

森委員：既存の冊子は、ぱっと見て、分かりやすく読みやすくして良い。女性の会も地域に密着して活動を行っているので、みなさんに配って活用したい。

藤村委員：学校運営協議会や地域学校協働活動は何なのかということは、幼児の施設には分かりづらい。また、学校運営協議会も中学校区のような広範囲であると、直接どう関わったらよいか悩ましいため、どのような人につなげていくのかがわかるとよい。

R3年度から4年度にかけてそれぞれの立場の方から事例をお話いただいたことをまとめていただくと、こんな時はこんな人に相談するとよいというのが分かってくるのではないか。

益川議長：まだまだ馴染みのない取組のため、松野委員からもあったが、確かにこれまで会の中でせっかくいろいろな立場の方からお話を聞いたので、その取組や現状、役割が見えてくる内容というのも良い。

岩田委員：手に取りやすいのは、ハンドブックで、地域学校協働活動という基本的な説明があったうえで、人に焦点を当ててきた事例を入れ込んでいく。QRコードを付けて、岐阜県の現状を毎年更新することで、ハンドブックをバージョンアップしていく方向が良いのでは。これがみなさんの机の上にあるというイメージを描いていて、この冊子を見れば民生委員や社会教育士の活動や、その人を軸にした活動はどのようなものが見えるもの良い。

益川議長：社会教育に関係している人はもちろんのこと、学校・地域の関係者など、誰に配布するかということも意識しながらご意見いかがか。

松野委員：冊子版の方が保存版になりやすい。

天野委員：今回は人材ということを言われたので、それぞれの役割の方が地域学校協働活動の中ではどういう位置関係なのか分かると、今後コーディネーターをされる方も助かる。例えば学校で何かを頼もうと思ったときなど、人材を見つけだすことは難しいので、その時に役立つもの良い。開いて、その人が何をやっているのかということが見えるというのは大事。

益川議長：これを見て、人材の立場、活動内容が分かり、うちの地域でいうところの人だなと思っ

てもらえるようなイメージか。

松野委員：包括的な図などで、地域学校協働活動があり、例えば、社会福祉協議会がそこにどう関わって、その活動内容が分かるようなものが良い。

村瀬委員：リーフレットは、特に見開き部分の一言一言が本当によく考えられている。

誰に届けたい成果物なのかを明確にした方が良い。

つかさどる立場の方には冊子の改訂版で、リーフレットは広くいろいろな方に手に取ってもらいたいが、その相手も絞った方が良い。

益川議長：今までのみなさんのご意見では、これまでの改訂版で「人」に焦点をあてたものという方向で考えたいというところか。

米原委員：ねらいと対象についてだが、地域学校協働活動の実際の活動に携わる方の目にもとまり、自分も当事者であることを促すようなものも必要。

益川議長：活動に携わるボランティアの発掘が難しい。

対象が広がるとどこに焦点を当てるかは難しい。どういう形になるか分からないが、「人」に焦点をあてたところの改訂版ということでよいか。

冊子で「人」を焦点にしたもの、一般の方により分かりやすいように概要版をリーフレットで改訂という考え方もある。

野中委員：自分が手に取って読みたいか、活動内容についてイメージしやすいかが大事。

活動内容を凝縮した短い言葉で伝えるのは難しい。インタビュー形式で、その人がどういったきっかけで活動を始めて、活動にはどういう苦労があってというのは非常にイメージしやすいが、予算や期間を考えると難しい。例えば、銀行シンクタンクの月報では、巻頭で企業のインタビューを掲載している。業務内容、歴史、課題、業界の動向・取組などがあり非常に分かりやすい。インタビューで活動の現状を紹介するとイメージしやすい。

QRコードについて、リンクにどのように入ってきたかカウントできるQRコードがあるので、成果物に対する成果の検証といった点で検討してみてもどうか。

益川議長：確かに、成果物がどう生かされたか、ということを検証すべきかもしれない。証拠に基づいた政策立案が言われている中、評価も視野に入れながら、QRコードについても工夫が必要ということ。

松野委員：保護者に興味を持たせ、広く地域学校協働活動を浸透させるという点で、今回は難しいと思うが、短い動画を作成するのが良い。学校から保護者に「すぐーる」アプリで連絡が来るが、保護者に動画URLを送れば1回はクリックすると思う。リーフレットを網羅した内容で、子どもたちが笑顔で話していたり、それに合った音楽をつけるイメージ。フォーラムのオープニングで使用するなど、県内外にPRできる可能性もある。下準備もお金もかかるので難しいとは思いますが、QRコードから動画に誘導という広がりもでてくる。今後考えていく上で、敷居が低くなって良いと思う。

益川議長：動画は訴求力が幅広くなるうえ、子どもたちもYouTubeを見るので、今後メインのテーマになってくるだろう。

今までのみなさんのお話をうかがうと、初歩的な内容で分かりやすく、「人」に焦点を当てた記事も入っているということを今回の成果としてまとめていくということによ

いか。手に取った人はそれを見ることによってこういった立場の人はこういう活動をしているということが分かり、自分たちの活動では誰に声をかければよいのかがわかるもの。

基本は冊子の改訂版のようなもので、概要版は余裕があればということにする。繰り返しになるが、冊子の改訂版にする、内容としては、初歩的なものも入れつつ、審議題のテーマである「人」を中心としたものとする、これを見ることにより、どういう立場の人とつながればどんな活動ができるのか、またさまざまな立場の人の活動を知ることにより、実際に地域の方とつながり、活動を促進できるようなものにする。発行時点で情報が止まってしまうため、情報の更新も視野に入れる。「人」の記事について、どういう形で掲載するかは要検討ではあるが、これまで会で報告いただいた方を中心に進めていくということによいか。

野中委員：改訂版か別冊かどちらがよいか。

データの更新があれば改訂が良いのかもしれないが、これまでの冊子があるので、別冊で作った方が予算的にも良いのでは。

益川議長：これまでの冊子は事例が入っているが、今回は「人」が入ってくる。体裁は同じ形で、シリーズ化したものになるのが良いのでは。改訂するというよりも、内容を「人」に焦点をあてて、別冊ということでこれまでの冊子のようなものを作成するという方向によいか。

唐突なことだったので、あとから思いつくことがあれば、また今までの議論を踏まえてご意見をいただければありがたい。事務局としての意見もあると思うので、それを頂戴しながら議論を深めていくということによいか。

事務局と議長とで議論しながら深めていきたい。会で参集ということではないかもしれないが、意見をうかがうことがあるということでご承知いただきたい。次回は、具体的に委員の皆様にご提示させていただきたい。

益川議長：議事が終了したため、進行を事務局へお返しする。